

ダライラマ 13 世の亡命と外交 (1904-1912)

—W.W. Rockhill との往復書簡の検討を中心に—

小林 亮介

はじめに

(1) 清朝の崩壊 (1912年2月) とチベット

- ・チベットの政治的地位をめぐる問題の形成 (1913年2月13日, 「独立宣言」)
- ・ダライラマ 13 世の外交: 各国との関係構築・再構築と支援獲得の試み, 中国への対抗
……イギリス・ロシア・モンゴル・日本など¹
→対清朝/中国認識はいかに変化し, 活発な外交活動の基礎がどう形成されてきたのか?
- ・清朝崩壊前, ダライラマ 13 世の二回にわたる亡命生活
第一次 (1904-1909): 英国武装使節団のラサ進軍 (1904) ……モンゴル・青海・五台山・北京
第二次 (1910-1912): 四川軍のラサ進軍 (1910) ……英領インド (ダージリン) へ
→ともに, ダライラマ 13 世の国際認識・対中国認識の変化を考える上で重要な時期

(2) 先行研究の成果と本報告の課題

- ・ダライラマ 13 世伝記, 及び著作集等の利用²
Jagou 2009: 北京訪問, 清朝との「施主・帰依処」関係再構築のこころみとその挫折
Sperling 2011: 五台山での各国使節・要人らとの会見, 国際理解を深めたこと
石濱 2013: 1909年を境に清由来の称号を用いず, 1913年以降は祝詞で中国に言及せず
- ・二度の亡命の間に生じた重要な変化
①イギリスに対する認識の変化→敵対から依存へ
②中国・チベット関係の破綻→「独立」(ランツェン rang btsan) という構想の芽生え³
⇒外交交渉の過程の検討を通じてこれらの変化を考察する必要
- ・アメリカ駐清公使ロクヒル (William Woodville Rockhill, 1854-1914) との関係への注目
二度の亡命を通じて, ダライラマ 13 世と外交問題・国際情勢に関して意見交換
五台山・北京での会見 (1908年)
- ・史料: 往復書簡等の利用, マルチ・アーカイブによるチベット政治外交史研究の模索

¹ Lamb (1966); 白須 (2011); Jampa Samten & Tsyrempilov, Nikolay (2012); *The Centennial of the Tibeto-Mongol Treaty* (2013).

² これら史料を本格的に用いて当時の政治過程を考察した先駆的研究として, 日本国内では日高 (2007, 2008) が挙げられる。

³ 今日, 「自由」を意味するランワン (rang dbang) という表現も, 20世紀初頭はランツェンと類似の文脈で用いられた。しかし, ランワンが20世紀以前の多くのテキストに様々な文脈で用いられてきた語であるのに対し, ランツェンは恐らくは20世紀初頭以降に特有の語であり, その起源・用法に検討すべき課題が多い。

1. ダライラマ 13世によるロクヒルとの関係構築

(1) ロクヒルについて (Varg1952; Meinheit 2012: 1; Wimmel 2003; 中野 2010)

- ・東洋学者ロクヒル
13歳からフランスにて生活、サンシール陸軍士官学校時代にチベット語学習開始
欧州にてサンスクリット語・チベット語・漢語を学び、仏教研究に勤しむ(1881-1883)
「アメリカ初のチベット学者」
モンゴル・チベット旅行とその記録⁴、文物収集
- ・官僚としてのキャリア
1884-93年、公使館員(北京)
1894-96年、第三国務次官補
1898-99年、全権公使(ギリシャ・セルビア・ルーマニア)
1900-05年、義和団事件処理に際しての特命使節(北京)
1905-09年、全権公使(北京)、華工問題への対応など
1909-13年、駐ロシア公使、駐トルコ公使
1914年にハワイにて死去
- ・アメリカの対東アジア外交とロクヒル
1898年の米西戦争とフィリピン領有、アジア進出の足がかり
対中国外交：列強による利権獲得競争の抑制を企図
第一次門戸開放通牒(1899)・第二次門戸開放通牒(1900)
→「中国の領土的・行政的保全」・「清帝国全域と均等かつ公平に貿易する原則」の主張

(2) ダライラマ 13世(フレー滞在)とロクヒルの最初の接触

- ・1905年夏、シシエルバツコイ(Ф. И. Щербатской)による紹介
13世は「初めてアメリカの名前を知った」⁵
→国際的な仏教学者間のネットワークが機能

【史料1】1905年7月19日、ロクヒル宛チベット語書簡⁶

- ①日露戦争終結・講和条約締結の歓迎(当時はロシア亡命を模索[Shaumian 2000:106])
- ②イギリス/ヤングハズバンドに対する敵愾心・警戒心
チベット人が「チベットの司法〔権〕を掌握(bod ljongs khrimis 'go rang 'dzin)」する必要があることを強調
→第二次亡命以降に頻りに用いられる「ランツェン」や「ランワン」はみられない
- ③各国の連帯によるチベット支援の要請

⇒日露戦争直後は、中国ではなく、あくまで英国の脅威への対抗として国際的支援を求め、チベットの政治的安定回復と自身の帰還を目指す

⁴ *The Land of the Lamas: Notes of a Journey through China, Mongolia, and Tibet* (London: Longmans, Green and Co., 1891). *Diary of a journey through Mongolia and Tibet in 1891 and 1892* (Washington D.C.: The Smithsonian Institution, 1894)など。

⁵ FO17: 1755, Sir E. Satow to the Marquess of Lansdowne, August 14th, 1905.

⁶ 差出人の名前は記されていないが、ダライラマ 13世に同行したブリヤート人アグヴァン・ドルジエフ(1854-1938)の可能性が高い。当時のドルジエフの動向については、Snelling (1993: 115-128)を参照。

2. チベットをめぐる国際関係の変容とダライラマ 13世

(1) チベットに関する中英交渉・英露交渉と各条約の締結

北京協定（英・中）：1905年2月に交渉開始，1906年4月26日調印

→ラサ条約（1904年）の内容を中英間で修正・再締結。チベット側は交渉から除外。

英露協商（英・露）：1906年初頭交渉開始，1907年8月31日調印

→英露の共同歩調，中国のチベットに対する「宗主権」を明記

通商章程（英・中 [+蔵]）：1907年9月交渉開始，1908年4月20日調印（三言語から構成）⁷

⇒これらの条約に関する情報をダライラマ 13世がどのように入手していたのか？⁸

(2) 13世・ロクヒル五台山会談（1908年6月）

・公使館員ハスキンス（Tomas Haskins，漢語通訳として同行）の日記⁹：（6月21日）

〔新条約（通商章程）に対する13世からの質問に際して〕

ロクヒル：「条約コピー送付」を約束

13世：中国人経由により自分で入手すべきだが，無理ならばロクヒルに頼みたい。通商に関する条約に反対はしない。境界問題（東チベット／四川）がさらに重要。

ロクヒル：両者が条文を遵守する限り英国との通商章程は良いこと。

イギリスにはチベットに対する領土的野心は無いこと。

→ロクヒルはイギリスとの関係構築を勧める。ダライラマ 13世は，清朝の東チベットにおける軍事行動・改革に対する警戒を強めていく。

・ダライラマからロクヒルへのチベット語書簡¹⁰（日付無し。ロクヒルとの会見以後と見られる。）

「3月に中国のアンバンであるチャン・インタン（張蔭棠）と，外国（イギリス）のアンバンであるウィルトン（E. C. Wilton）と，ツァロン・シャペー・ワンチュク・ギェルポらが押印した条約（1908年通商章程）を，〔13世の部下が？〕模写して〔こちらに〕献上してきました。原文（ma yig）を受け取れるように，お手伝い頂きますようお願いいたします。」

→ロクヒル経由で中英交渉に関する情報入手を試みている（「原文」入手の意味はやや不明瞭）

⁷ FO93/23/26, Regulation: Trade in Tibet, April 20th 1908.

⁸ 英露協商については，1907年9月27日，ドルジエフの要請にもとづき，ロシアがダライラマ 13世に条約内容を報告している（Lamb 1966: 178; Shaumian 2000: 140）。

⁹ *Thomas W. Haskins Papers*, “Notes on a journey to Wutai Shan, 1908.” 著者 Haskins とその日記については，Meinheit (2012)を参照。

¹⁰ *William Woodville Rockhill Additional Papers, 1879-1915*. MS Am 2122 (85) 15.

3. 第二次亡命時におけるダライラマ13世とロクヒルの関係

- ・四川軍のラサ進軍(1910年2月)による英領インド亡命後も継続する両者の関係
- ・清朝とイギリスに対する認識

【史料2】：ダライラマ13世からの書簡，1910年10月4日(英・蔵合璧)

下線① ラサ条約(1904年)にもとづく友好関係を強調

→中英間の各条約(1906年北京協定，1908年通商章程)に対する否定を含蓄?

下線② 「仏教」の共有によるロクヒルとの個人的信頼関係の強調

下線③ 「ランツェン(独立)」の主張

[チベット文](下線②・③)

あなたは仏教に信心と忠誠厚く，私とこれまでに直接会い心を通わせておりますので，現在チベットの仏教と政治の権限にかつてのごとく「ランツェン(独立)」がもたらされるように(bod kyi bstan srid dbang byus sngar gnas rang btsan yong ba)，そちらからも対応していただくのが良いものと思っております

→管見の限り，チベットの政体を「ランツェン」として表現した初めての用例(清滅亡以前)。

歴史的に「ランツェン」だったことを強調(モンゴルとの違い)。

⇒ロシア・イギリス・日本・アメリカいずれに対しても「ランツェン」を主張した書簡を送付¹¹

[英文](英領インド側が作成)..... I know you personally, that you believe in the Buddhist religion, I should therefore request of you that you will be good enough to help me in this disturbance and advice if there is any way of restoring me to my religious country. ...

→“independence”という訳語は用いられてない¹²

(今日、「ランツェン」と“independence”は対訳として定着)

- ・ロクヒル：自著の贈呈

“The Dalai Lamas of Lhasa and their Relations with the Manchu Emperors of China, 1644-1908.” *T'oung Pao*, Second Series, Vol. 11, No. 1 (1910): 1-104.

→1910年9月，モリソン(G. E. Morrison) 経由にてダージリンのダライラマ13世に送付¹³

【史料3】ダライラマ13世からロクヒルへの書簡(1910年12月25日，英・蔵合璧)

下線①：チベット・中国間の歴史的「施主・帰依処関係」を国際的に認知させるものとして賞賛
チベット語訳の作成の意思

→ロクヒルの著作がダライラマ13世の歴史認識に影響を与えた可能性

下線②：清朝皇帝が政治を判断できる状況ではないことを問題とする

下線③：旧来の関係(施主・帰依処関係)を回復する必要を説く

⇒インド亡命後，「ランツェン」を主張すると同時に，1910年の段階では清朝との関係再構築の選択肢を残す

¹¹ 清朝崩壊直後のロシア・イギリスに対する書簡の分析については小林(2014)を参照。日本への書簡は，1913年にダライラマ13世から大正天皇に宛てた書簡(「青木文教アーカイヴス」，史料番号22)を参照。

¹² 1913年にチベット訪英使節が携行したダライラマ13世のチベット語書簡の英訳(イギリス側作成)もまた，ランツェンを“independence”として訳出していない(小林2014: 273-274)。

¹³ Lo Hui-min, ed., *The Correspondence of G. E. Morrison*, Vol. 2, Cambridge, etc.: Cambridge University Press, 1978, W.W. Rockhill to Morrison, St. Petersburg, September 8th 1910.

おわりに：

- ダライラマ 13世からみたロクヒルとの個人関係の意味：
「仏教の共有」、外交官としての実務経験、清朝・チベット関係史の知識に対する信頼
アメリカ・イギリス・清朝との関係媒介や、重要情報・アドヴァイスの提供を期待
- 清朝との関係：
1910年、インド亡命直後から「ランツェン（独立）」の回復を主張
→旧来の清朝・チベット関係（施主・帰依処）の再構築とも矛盾せず
- 英国に対する認識：
五台山・北京訪問前後での大きな変化→ロクヒルの助言
- アメリカとの関係
チベットがロシアに続き関係構築を目指した国家（イギリス・日本より早いか？）
日本と並び、英露協商に拘束されないアメリカへの期待

◎史料・参考文献

- FO: Foreign Office Archives, the National Archives, London.
- Jagou, Fabienne. 2009 “The Thirteenth Dalai Lama's Visit to Beijing in 1908: In Search of a new Kind of Chaplain-Donor Relationship.” Kapstein, Matthew ed., *Buddhism between Tibet and China*, Boston, Massachusetts: Wisdom Publications.
- Jampa Samten & Tsyrempilov, Nikolay. 2012 *From Tibet Confidentially: Secret Correspondence of the Thirteenth Dalai Lama to Agvan Dorzhiev, 1911-1925*, Dharamshala: Library of Tibetan Works and Archives.
- Lamb, Alastair. 1966. *The McMahon Line: A Study in the Relations between India, China and Tibet, 1904-1914*, 2 vols., London: Routledge & Kegan Paul.
- Lo Hui-min(駱惠敏), ed., *The Correspondence of G. E. Morrison*, Vol. 2, Cambridge, etc.: Cambridge University Press, 1978
- Meinheit, Susan. 2011 “Gifts at Wutai Shan: Rockhill and the Thirteenth Dalai Lama” *Journal of the International Association of Tibetan Studies*, No. 6.
- . 2012 “Brief Encounters: Rockhill and the 13th Dalai Lama at Wutaishan.” Paper at “1913 Treaty Between Mongolia and Tibet,” Ulaanbaatar, Mongolia, October 2010.
- Snelling, John. 1993. *Buddhism in Russia: The Story of Agvan Dorzhiev, Lhasa's Emissary to the Tsar*, Shaftsbury, Dorset: Element Books.
- Sperling, Elliot. 2011 “The Thirteenth Dalai Lama at Wutai Shan: Exile and Diplomacy.” *Journal of the International Association of Tibetan Studies*, No. 6.
- The Centennial of the Tibeto-Mongol Treaty: 1913-2013*, *Lungta*, No. 17, Dharamsala, 2013.
- Tomas Haskin Papers, the Library of Congress, Washington DC.
- Varg, Paul. 1968 *The Open Door Diplomat: The Life of W. W. Rockhill*, Urbana: University of Illinois Press.
- William Woodville Rockhill Additional Papers, 1879-1915* [MS Am 2122], the Houghton Library, Harvard University, Boston.
- Wimmel, Kenneth. 2003 *William Woodville Rockhill: Scholar-diplomat of the Tibetan Highlands*, Bangkok: Orchid Press.

青木文教アーカイブ(国立民族学博物館所蔵)。

石濱裕美子 2013 「ダライラマ 13世の著作に見る自称表現と政体表現の変化について」『早稲田大学大学員教育学研究科紀要』No. 24.

小林亮介 2014 「チベットの政治的地位とシムラ会議——翻訳概念の検討を中心に」岡本隆司編『宗主権の世界史——東西アジアの近代と翻訳概念』名古屋大学出版会.

白須浄真 2011 「ダライラマ 13世による明治天皇への上書・献納品謝絶の顛末」白須浄真編『大谷光瑞と国際政治社会——チベット・探検隊・辛亥革命』勉誠出版.

中野聡 2010 「太平洋植民地の獲得とアメリカの「アジアへの道」」和田春樹等編『東アジア近現代通史 2——日露戦争と韓国併合：19世紀末(1900年代)』岩波書店.

日高俊 2007 「ダライラマ 13世二度目の亡命の意義について」『日本西藏学会会報』53.

----- 2008 「民国成立期(1912-13)中国とダライ・ラマ政権：ダライ・ラマ帰還と和平交渉」『中国研究月報』62(8).